

はちの巣

小川未明

青空文庫

ある日、光子さんは庭に出て上をあおぐと、青々とした梅の木の枝に二匹のはちが巣をつくつていました。

「おとなりの勇ちゃんが見つけたら、きつと取つてしまうから、私、知らさないでおくわ。」

そう思つて見ていますと、一匹ずつかわるがわるどこかへとんでいつては、なにか材料をくわえてきました。そして、一匹がかえつてくると、いままで巣にとまつて番をしていたのがこんどとんでいくというふうに、二匹は力をあわせてその巣を大きくしようとしていたのです。

そののち、光子さんは毎日梅の木の下に立つて、その巣の大きくなるのを見るのがなるとなくたのしみでありました。

「もう、今日はあんなに大きくなった。」

しかし、それはほんとうにすこしずつしか大きくなかなかつたのです。二匹のはちが小さな口にくわえてきた材料を、自分の口から出るつばでかためていくのでありましたから、なかなかたいへんなことです。けれど、はちは、たゆまずうまずに、朝も晩も巣を

つくることに、いっしょうけんめいでありました。

ところが、どうしたことか、そのうち巣にとまっているのがいつも一匹であって、もう一匹のすがたが見えなくなつたことです。

「どうしたんでしよう？」と、光子さんはしんぱいになりました。

光子さんはお母さんのところへ走つていきました。

「ねえ、お母さん、はちが一匹いないのよ。いつも二匹のがどうしたんでしようね？」といつて、きいたのであります。

「そうね、きつとそのうちにかえつてくるでしょう。」と、お母さんにもすぐにはわからなかつたのでした。

「もう、ずつとかえつてこないの。一匹がさびしそうにしているの。」と光子さんは、なんだかひとりのこされたはちの身の上を思うと、気が気でなかつたのです。

「どうしたんでしようね。いたずらつ子にでも殺されたか、悪いくもの巣にでもかかつて、かえれないのかもしれない。」と、お母さんはおつしやいました。

——悪いくも——ということが、すぐに光子さんの頭に強くひびいてきました。いつであつたか、ひさしから木の枝にかけていたくもの巣に、はちがかかつて、とうとうくもの

ために殺されたのを見たことがあったからです。また、その巣には、せみもかかれれば、ちようもかかったのです。さいしよ、これらの虫がとんできて、目に見えない細い糸に足をとらえられると、逃げようとしてもがきます。しかし、いくらあせつても、もちのように糸がねばりついて、足にからみつくばかりです。そのうちに、虫は弱つてしまふ、そのとき、どこからか黒い大きなくもがあらわれてきて、するどい口で生き血を吸つてしまふのであります。

そのありさまを思いだすと、この勤勉なはちもそんなめにあったのではないかと、いたましいすがたが想像されたのです。そればかりではありません。また——いたずらつ子に殺される——というしんぱいも、ないではなかつたのです。

いつか、勇ちゃんが水たまりへ水を飲みにおりてきたはちを、持っていた棒でたたきおとして殺したことがあったのです。

いずれにしても、一匹のはちはなにかの不幸に出あつて、もうかえつてこないもののように思われました。光子さんは、また、梅の木の下にもどつてきました。

「まだかえつてこないのか。どうしたんでしょう、ひとりで、さびしくない？」といつて、巣にとまっている一匹のはちに話しかけました。

けれど、ものをいうことのできぬはちは、ただ巣にとまってじっとしているばかりでありました。ちょうどそこへ、勇ちゃんが遊びにきましたから、光子さんは梅の木の下をはなれてしまいました。

「光子さん、まだ梅の実がなっているね。もう梅の実をあまくなつた？」といつて、勇ちゃんも梅の木を見あげました。

光子さんは、勇ちゃんがはちの巣を見つけたらたいへんだ、きっとそのままにしておかないと思いましたが、

「勇ちゃん、こっちへいらつしやい。きれいなお人形さんを見せてあげるわ。昨日、よそのおばさんにいただいたのよ。」といいますと、勇ちゃんは日にやけたまっ黒な顔をして、

「お人形さんなんか、いいよ。それより、ねこをつれておいでよ。」と、いいました。勇ちゃんは、ねこが大きいのでした。

「タマは、いまいないの。」と、光子さんはタマを出すまいとしました。

なぜなら、勇ちゃんはあまりかわいがりすぎて、ねこを苦しめたからです。

「どこへいったの？」

「勇ちゃんはお家の内をのぞいていました。光子さんは、タマが出てこなければいいと思いましたが、出てきたら、また勇ちゃんがだいたり尾をひっぱったり、いやだといって逃げるのをむりにおさえて、外へつれていってしまおうとしんばいになったからです。」

「きつと、おじいさんのところでしょう。」と、光子さんはいいました。

「勇ちゃんは、光子さんの家でいちばんおじいさんがこわかったのです。だから、もうそれつきりねこのことをいうのをやめてしまいました。」

「光子さん、遊びにいこう。」と、勇ちゃんがいいました。

「ええ、いきましよう。」

光子さんは勇ちゃんと肩をならべて、木戸をあけて、きらきらと日が草木の葉にかがやいている往来の方へと出ていきました。あちらには、年ちゃんやよし子さんたちが遊んでいました。すぐに、みんなはいつしよになりました。

「原っぱへポチをつれて、きちきちばったを捕りにいこう。」と、勇ちゃんがいいました。ポチはみんなのすがたを見ると、とんできました。そして、いきなり勇ちゃんにとびついて勇ちゃんの顔をなめたりしました。

原っぱへいくと、ほかにも子供たちがいて、きちきちばったを追っていました。また、

ほかの女の子は、じゆず玉を取ってくびかざりなどをつくっていました。

「私、じゆず玉がほしいの。勇ちやんとつてくれない？」と、光子さんが勇ちやんのいるところへきて、いいました。

勇ちやんはきちきちばったを捕らえて、指のあいだにはさんでいました。

「光子さん、じゆず玉がほしいの？ たくさん取ってあげるから、こんどタマをいじらせてくれる？」と、ききました。

光子さんは、勇ちやんがねこをいじるのはしつこくてかわいそうだけれど、いじめるのではないから、「うん。」といて、承諾しました。

「じゃ、このきちきち持つていておくれ。」といて、ばったを光子さんにわたして、自分分は草むらの中にはいりました。

ポチが、まっ先になつてとびこみました。

光子さんは、こちらにほんやりと立つて、勇ちやんがじゆず玉の莖を折ってくるのを待つていました。年ちやんやよし子さんは、あちらでまりぶつけをしていました。青い海のような空には、白い雲がほかけ船の走るように動いていました。

このときです。

「あいた！」と、ふいに勇ちやんのさけぶ声（こゑ）がしました。

「どうしたの？」と、光子（みつこ）さんは顔色（かおいろ）をかえて、自分（じぶん）も草むら（くさむら）の中（なか）にかけようとした。勇ち（いさむ）ちゃんは片手（かたて）にじゆず玉（だま）の茎（くき）をにぎり、片手（かたて）でほおをおさえて泣（な）かんにばかりにでて出てきました。

「はちにさされた！」といって、目（め）からなみだを出（だ）しました。

「はちに？」

光子（みつこ）さんは、わるかったと思（おも）いました。

「勇ち（いさむ）ちゃん、かん（じぶん）にんしてね。」といって、光子（みつこ）さんはわびました。

自分（じぶん）がじゆず玉（だま）を取（と）ってくれとたのまなければ、勇ち（いさむ）ちゃんは、はちになんかさされなくてもすんだのだと思（おも）ったからです。勇ち（いさむ）ちゃんは、じゆず玉（だま）のなっている枝（えだ）を光子（みつこ）さんにわたすと、きちきちばったをうけ取（と）って、

「お母（かあ）さんに、お薬（くすり）をつけてもらうから。」といって、走（はし）ってお家（うち）へかえってしまいました。

光子（みつこ）さんは、きゆうにつまらなくなつて、じゆず玉（だま）の枝（えだ）をひきずるよう（よう）にしてお家（うち）へかえりました。じゆず玉（だま）の実は、銀色（ぎんいろ）に、むらさき色（いろ）に、さながら宝（ほう）石（せき）のよう（よう）に光（ひか）つて

いました。

お家へかえってから、梅の木のはちを見ると、ひとりぽっちで巣をつくっていたはちとおなじなはちが勇ちやんをさしたのだと思うと、きゆうに、はちにたいする同情がうすくなつたけれど、また、そのしおらしいすがたを見ると、

「お家のはちは、かわいそうなのよ。」と、ひとり言をして、光子さんはそのはちを見まもっていました。

「これは、きつと、お母さんばちにちがいないわ。」と思うと、光子さんの目の中からしぜんにあついなみだがこぼれおちたのです。

二、三日たつて、勇ちやんは木戸口から、「光子さん！」といて、遊びにきました。まだ、ほおがいくらかはれていました。そのうちに、勇ちやんは梅の木のはちの巣を見つめました。

「あ、はちが巣をかけているよ。」といて、勇ちやんは梅の木見あげながら小さな太い指でさしました。

光子さんは、胸がどきどきしました。「さあ、たいへんだ！」と思つたからです。このあいだの怒りもあつて、勇ちやんはきつと、このはちの巣を取るにちがいないと思いまし

たから、光子さんがおどろいたのもむりはなかつたのです。はたして、勇ちゃんはあたりを見まわして、なにか棒がないかとさがしていました。

「ねえ、勇ちゃん、このはちは、ひとりぼっちでかわいそうなのよ。」と、光子さんはあわれっぽい声で、いいました。

「ひとりぼっちなの？」と、勇ちゃんは、ふしぎそうにききかえました。

「え、そうなの。二匹でいたのが、一匹いくら待っても、もうかえってこないの。」と、光子さんは答えました。

「ほんとう、どうしたんだらうな。」と、勇ちゃんは目をまるくしました。

「いたずらつ子に殺されたのか、わるいくもの巢にかかったんだらうって、お母さんがおつしやつてよ。」

勇ちゃんはなんと思ったか、だまって、たった一匹巢に止まっているのを見ていました、

「かわいそうにね。」といって、きゆうに、はちをいたわるようにながめていました。

「まあ、よかつた！ やはり勇ちゃんはやさしい。」と、光子さんは心の中で思いました。「勇ちゃん、あんまりタマをいじめちゃいやよ。」といって、光子さんは奥から子ねこを

だいてきました。

^{いさむ}勇ちゃんは、
にこにこして両手^{りょうて}を出^だしていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

※表題は底本では、「はちの巣《す》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

はちの巣

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>